NOTTURNO
ASSOCIAZIONE
CULTURALE MUSICALE
DI MILANO

ダンテとバッハの巡り合い

…と　ルチャーナ・マタロンの絵画

ピアノ : 知念杉子

俳優 : ダニエレ・クラスティ

MUSICA

POESIA

ダンテ・アリギエーリ
「新生」より　七つの詩

J.S.バッハ
フランス組曲　第5番　BWV816　ト長調
アルマンド
クーラント
サラバンド
ガヴォット
ブーレ
ルール
ジーグ

ルチャーナ・マタロン
七つの絵画

第12章

歌よ、お願いだ、〈愛〉の神をさがして
〈愛〉の神と連れ立って、あえかなる君の御前に行って
わたしの言訳を伝えてくれ。
〈愛〉の神がそれに引き続き先様にわたしの身の明かしを立ててくれるだろう。

歌よ、行ってくれ。お前は行儀作法をよく心得ているから、
たとえ連れがいようがいまいが
臆せずにどこへでも行くだろう、
だがそれでも心安んじて行きたいのなら
まず〈愛〉の神を探してお願いするがいい。
その後見なしに行くのはやはり好ましくない。
お前のいうことに先様は耳をかしてくれるとは思うが、
なにしろ先様はわたしに腹を立てているに相違ない、
だからもしお前が〈愛〉の神の介添えなしで行くなら、
お前は軽んぜられ、まともに相手にされぬかもしれない。
だから甘美な調べで、歌よ、お前は〈愛〉の神と一緒に
あえかなる君のお慈悲を乞うた後、
こうした言葉でうたってくれ、
「奥さま、もし奥さまの御意にかないますなら、
なにとぞ私を奥さまのもとに遣わした
あの男の言訳を私の口からお聞きください。
〈愛〉の神もここに参りました。〈愛〉は色よきあなた様のお力によって
思いのままにあの男の顔色を変えました。
またあの男がよその女にみとれるようにもいたしました。
その訳をお考えください。あの男が心変わりしたのではございません。」

またこうも言うがいい、「奥さま、あの男の心は

いかにも固く、奥さまを一目見た時から
御許を離れず、奥さまにお仕えして、
ゆめ二心はございませんでした」
もしあえかなる君がお前を信じてくれぬようなら、
真実を知る〈愛〉の神に質すよう言ってくれ。
そして終わりにはへりくだってあえかなる君にお願いしてくれ、
「もしそんな男は許せませぬ、と言うのでしたら、
使いを介してその男に死ぬようにお命じください、
忠実に仕える者としてその御命令に必ず従い死んでみせまする」と。

歌よ、あえかなる君の御前を辞去するに先立ち
あらゆる慈悲の鍵とも仰ぐ〈愛〉の神を呼んで
どうかわたしの身の明かしを立ててくれるよう言ってくれ、
「この私の爽やかな調べに免じて
どうかあえかなる君と御一緒にここにお残りください。
あなたに仕える僕のために思うがままに弁じてください。
もしあえかなる君があなたの願いを容れて許すようなら、その際は
にっこりとした表情で仲直りしたことをお知らせくださいますように」
やさしい歌よ、もしこれが良い事と思うなら、
行ってくれ、そして〔存分に歌い上げて〕なにとぞ誉れをあげてくれ。

第21章

あの人は目に〈愛〉を宿しているから
あの人の目にふれるものはみなすばらしくなり、
あの人が通ると人々はみな振り返る。
あの人に挨拶されると僕らの心はふるえ、

どぎまぎして僕らは顔を伏せる、
そしていまさらのように自分の短所が嘆かれる。
あの人の前では怒りも消え、たかぶりも失せる。
ああ、女たちよ、あの人に敬意を表したいのだ、助けてくれ。

あの人が話しているのを聞くと、
優しく、謙虚な気持が胸底から湧いてくる。
幸せな人だ、はじめてあの人を見た人は！

あの人がにっこりと笑う時の表情は
なんともいえない、心にもとめておけない、
あの人は奇蹟、新しいすばらしい高貴な奇蹟なのだ。

第7章

あわれ、いま〈愛〉の道行く君たちよ、
気をつけてじっと見てくれ、
世の中にわたしほど深く苦しむ人がいるか否かを、
すまないが、我慢して聞いてくれ
そして考えてくれ
わたしが一体なぜ一切の苦しみの宿であり鍵であるのかと。

わたしのいたらぬ徳ゆえでなく、
〈愛〉の神はその気高さゆえに、
わたしが甘美な人生を快適に送ることを許してくれた。
すると背後からこんな噂が耳にはいった、
「一体、いかなる運命の星の御利益でこの人は
こんな軽やかな心をもつことができたのだろうか？」

そんな気楽なわたしだったが、愛の打出の小槌が打ち出してくれた
快活さをすっかり失くしてしまった。
だからうちひしがれて
ものいうことすらももはや物憂い。

空っぽを恥じて
中身を隠そうとする連中のように
外面だけは陽気にはしゃぐ。だが
その実、わたしの心はくずおれて泣いている。

第26章

なんと優しくなんと素直なのだろう、
あの人が人々に会釈する姿は！
もう目をあげて直視するのも面はゆい、
舌ももつれて声が出なくなってしまうのだ。

あの人は歩く、人々の褒め言葉を聞きながら、
慈悲深くつつしみを身にまとい、
さながら天上から地上へ
奇蹟を示しに来た人のようだ。

あの人がにっこりと挨拶を返すと、
優しさが目から心へしみいるような気がする、
それは感じた人でなければわからない優しさだ。

そしてあの人の口からは愛にみちた
さわやかな霊が外へ出てぼくらの魂へ
呼びかけにくる、「そっとお嘆き」

第41章

広くひろがり回転する天の彼方へ
溜息は舞い上がります。わたしの心から洩れ出た吐息です。
〈愛〉の神が涙ながらに吹き込んだ新しい霊に引かれて、
溜息は上へ上へと天高く飛んで行きます。

その願う天の高みに到達するや
一婦人にお目にかかります。天上の栄光に浴した方でした。
光り輝いておられます。巡礼の霊は
光彩に照らされたその方をじっとみつめます。

しっかり眺めました、そしてしっかりその様子をわたしにまた語ってくれました。
けれどもその言葉が難しくて解らない。
語ってくれとお頼みしたこの憂いの心に向けて語ってくれたのですが。

第32章

来てくれ、優しい心根の人々よ、哀憐の情に心動かされて
来てわたしの吐息に耳を傾けてくれ。
慰めもないままに吐息は洩れる、
だが吐息が洩れればこそわたしはまだ苦痛に耐えて死なずにすんでいるのだ。

胸がすっきりはれるまで存分に泣きたい。
だがあの君を偲んでこれ以上涙するには
両の眼はもはや言うことを聞いてくれるまい、
わたしがあまりにも無理な頼みをするからだ。

聞いてくれ、吐息が幾度もあの君を呼ぶのを。
君はその徳性にふさわしい世界へ
行き給うた。

また聞いてくれ、時として吐息がこの現世を
悩み苦しむ魂の名においてさげすむのを。
その魂は〔この現世で〕至福から見棄てられてしまったのだ。

第20章

〈愛〉と高貴な心とは同じ一つのものなのだ。
それは賢者も述べる通りで、
どちらかが欠ければ他は存在しない、
それは理がなければ理性がないのと同じことだ。

自然は恋心に燃えたとき、この二つを造り、
〈愛〉を主君とし、心をその住処とした。
〈愛〉はそこで眠り、そこで憩う、
時には短く、時には長く。

美はついで賢女の中にあらわれ、
人の眼をよろこばせるから、心には
その喜びを求める望みが生じ、

その望みは長く心にとどまり、
〈愛〉の霊を眠りからよびさます。
好男子が女を魅了するのもまさにこれと同じことだ。

Notturno
Associazione Culturale Musicale di Milano

in collaborazione con

Fondazione Luciana Matalon

Una produzione
Bonilauri Films